



No. 1 円鏡（平螺鈿背）部分〔北倉42-11〕

約1.6倍

円鏡（平螺鈿背）〔北倉四二―一〕

この鏡は旧態を保っている唐式鏡である。

写真は平螺鈿背の一部を拡大したもので、螺鈿・瑠璃・赤色琥珀の宝花紋が嵌入され、その間隙に一〇二mmの藍青・天青・灰緑・灰白色の碎石粒が、ピッチ様の物質により充填されている様子がよくわかる。

藍青色の石は青金石、天青色はトルコ石である。灰緑色の石は緑釉陶片ではないかとの疑いもあったが、現在鉱物標本あるいは宝石として見られるトルコ石の色の変化から考えて、これもやはりトルコ石と思われる。

（藤原 卓）

（撮影 山中五郎）



No. 2 水精玉 第5号 〔中倉178〕

約7.3倍



No. 3 水精誦数 第15号 〔南倉57〕

約7.3倍

水精玉第五号〔中倉一七八〕

正倉院には大小さまざまな水晶玉が多数収蔵されており、その中にはこの「くちなし玉」のように内包物を含むものが少ない。

この玉には、おそらく電気石であろうと思われる濃緑色針状の鉱物が内包されている。

今後、正倉院の水晶玉の内包物を詳しく調査すれば、水晶の産地を解明する手掛かりの得られる可能性は高い。

（藤原 卓）

（撮影 成瀬正和）

水精誦数第一五号〔南倉五七〕

写真の右側の玉は、水晶の自然結晶の柱面の残ったまま玉に研磨されている。白く光っているのが結晶面である。この面には水晶の結晶の柱面に見られる独特の条線がはっきり認められる。この一五号の中にはこういう玉がいくつか見られる。

この玉はおそらく、この玉と同じ位の径の水晶の結晶から作られたのであろうが、小さい水晶から少しでも大きい玉を作ろうとした苦勞がうかがわれる。

（藤原 卓）

（撮影 成瀬正和）